

「桐生地域における近代化産業遺産を活用した地域活性化の取り組み」

1. ノコギリ屋根について

桐生の近代化産業遺産（織物産業遺産）のうち現存する「ノコギリ屋根」建造物の現況はおよそ220棟（中小合わせて）程度であると推測されます。平成元年の調査では312棟ありましたので、16～17年間で100棟は解体処分されたことになります。危惧的な状況下にあります。それでも現在世界一の集積度を誇っております。

2. 地方の自立とストックの活用

地方が自前で生きていくために環境問題や持続性の視点でストックを活用することが個性的自立のためには最も重要である、という認識から桐生のノコギリ屋根の活用を考えてきました。

3. 桐生型の活用法

1000年にわたり織物産業で伝統を培ってきた桐生はデザイン性に優れた超上質な布づくりが行われてきましたので総合的な繊維産業の底力と高い文化性、創作性などの都市のDNK（桐生のDNA）が潜在しています。また、先人の教育にかけるエネルギーは、現群馬大学工学部を一地方都市に生みしました。

4. 21世紀を生きる先進国の役割

桐生には、①文化・芸術・デザイン・CG・IDなどの文化産業力や、②超最先端の科学技術系の研究開発事業の地場産業化、さらに、③これらと世界遺産レベルのストックとの融合からの都市型新文化産業観光などによるまちづくりが似合う、と言えます。まさに、知的で生産性の高い創造発想型産業の集積する街として先進国日本のモデル都市としての役割を牽引できる都市となる可能性を秘めています。

5. ノコギリ屋根の活用

先進国が為すべき産業の中で効率性の高いコンパクトな知的地場産業の振興を考えたときノコギリ屋根の建造物は最適な要素を持ち合わせていると言えます。つまり、デザイン性が高く高度な技術と上質な布づくりの生産性など平和産業のものづくりをベースにした芸術と科学が融合した産業史が桐生のノコギリ屋根にしみ込んでいます。芸術、工業、科学、教育、文化などの全方向オーラが渦巻いていて、感性の高いクリエイター（文化、芸術、デザインコンテツ、科学者…）達にとっては、この中での創作・発想活動はそのオーラを背に受け、エネルギーと対峙して更なる高まりの中で創造・開発・研究等続けることになります。

6. 集積する力で世界平和を

ここに（桐生に）これらのクリエイター達が、次々と世界中から移住してきて集積が始まると、美しく、新鮮な山紫水明な天然と相まって、クリエイティブな活動のマグマが国際社会へ大きく影響していき、ヨーロッパを越えた日本型を示唆していくことになります。150棟のノコギリ屋根に5～6人のクリエイターが入ると800人程度の知的バレーの街となります。800人はその周囲に何千人の家族、知人、友人、先輩、後輩が付いています。まさに工場誘致を越える人材誘致による産業発展と世界平和運動となります。

7. 「無鄰館」による実践（別紙参照）

無鄰館はビジョンや夢で終わってしまわないよう、上記コンセプトのもと1999年から実践が始まりました。現在は彫刻、油彩画、服飾デザイナー、ヴァイオリン制作、ハーブ講師、建築設計等9人のクリエイター達により活動が行われています。今後の課題は①桐生市内のノコギリ屋根の保存・保全②外国人や科学者等のクリエイターによる活用③国際社会への情報提供などとなっています。

無鄰館館長 北川紘一郎

(support by 桐生商工会議所)

無 鄰 館 MURINKAN

◎無鄰館の活用

「無鄰館」は近代化遺産と呼ばれる歴史的建造物群（織物産業遺産）を現代社会のなかで多角的に活用し街づくりのデザイン要素として、文化的科学的生産性をあげている古くて新しい施設です。

その一つは、①歴史的織物工場（旧北川織物工場）と、ここに集うクリエイター達とが熱く融合して機能している創作工場であり、まさにクリエイターズファクトリー（作家集団工場）と言える部分です。「無鄰館」のノコギリ屋根の古い織物工場には「築造者の気迫力と歴史的エネルギー」が充満しています。このエネルギーとは、高度な生産技術力で織られた美しいデザイン紋様の布づくりに投入された先人の情熱と時間経歴の持つポテンシャルの高いエネルギーです。ここで活動する創作者達は歴史的建造物（織物産業遺産）の持つ強烈なクリエイティブ・エネルギーを背景にしてそれぞれに創作活動を続けています。

ここは今、全体にオーラが渦巻く知財生産場の一拠点であり、反ブラックホール型のエネルギー発生源・震源地と言えます。湧き出るエネルギーの乗り移った作品群が次々と外へ飛び出していく不思議なクリエイターズファクトリーです。併設の小ホールでは音楽や映画、男のきもの学坊、文化教室、桐生笑学校が企画され、ギャラリーではアーティストらの作品が展示されています。また、古いレンガに映されるハーブガーデンのカルチャー教室では香り、食、健康などをテーマとしたヒューマン・フィットセラピーの実践に取り組んでいます。

もう一方、②和風住宅、蔵、和風庭園、祠（ほくら）、上市場と呼ばれた買場通りの町屋などの歴史的建造物の一部は日本の伝統芸術、芸能など日本文化を理解するための研修、地域コミュニティや国際交流の場としての新たな活用がされています。

◎無鄰館のネーミング

かつて桐生は日本の近代化の国力を支えながら大きな繁栄を遂げた繊維の町でありました。本町一丁目、二丁目は桐生新町発祥の地として当時の産業遺産や文化遺産が点在し、江戸時代の地割りや路地も残り、その名残を留めながら生活している最も桐生らしい地域です。本町二丁目には歴史的建造物群の中でもとりわけ有名な「有鄰館」という古い商家を活用した市有のイベント施設が存在しています。本町一丁目の「無鄰館」は本町二丁目の「有鄰館」に敬意を表しつつ、相対するもの双方の求心力と相乗効果に引かれて自然発生的に名づけられました。宇宙にはプラスとマイナス、男と女、陰と陽、有と無などが在るごとく…。

◎無鄰館の役割

「無鄰館」の建造物群は明治から昭和の初期に築造され、当時は超々上質な絹織物を生産し世に提供しておりました。現在、「無鄰館」として再生（突然変異）したこの施設は単にイベント専用の施設ではなく総合的な工芸・技術・科学による創作・革新（イノベーション）の一拠点となりました。

桐生の伝統的個性である歴史資産が知的産業に活用されて蘇えるとともに天然に恵まれた美しい桐生が環境に配慮した先進的なものづくりと情報のまちとして進化し、世界的アーティストや技術者などの創作者達が集積する「小さな世界都市」が形成され魅力ある地域生活圏が構築されることを願っています。

桐生全体がバウハウス様となり人材知財誘致を活発にし、その昔、幕府天領の地として自由人が集まり活躍した時のように壮大な桐生再創を進めることは企業誘致を超えるものであると思います。スローではあるが力強い先進国の新しいヒトの生き方の手法の一つとして未来に向けた地域発のルネッサンス波動となるよう希求しています。

◎無鄰館から世界平和に向けて

同時に「無鄰館」は成熟した桐生が芸術科学文化の集積した都市型新文化産業観光都市という一面からクリエイター達を核（親善大使）として国際交流、国際親善のなかで異文化を理解し人類愛のもとに広く世界平和の実現に貢献することを目的に運営されています。

2000年01月 無鄰館館長 北川紘一郎
(2007年改)

(support by 桐生商工会議所)